

コロナ・母・現在

吉行 和子

(女優・エッセイスト・俳人)

私が「コロナ」という名前を知った日は、はっきり覚えてる。

狭いセットの中でドラマの撮影が続いていた。その日は喉の調子が悪く、やたらに咳をした。「風邪ではありませんからうつしません」と言い訳をしながらやっていったのだが、翌日、周りのスタッフが全員白いマスクをしているのに気がついた。奇妙な光景だった。毎日見えていた顔が、まるで知らない人たちに囲まれてしまったような、別世界に連れてこられたようなヘンな雰囲気。

一緒に出ていた藤竜也さんに、どうしたのかしら、と聞くと、まだ公にはなっていないけど、

コロナウイルスというのが発生して、世界に拡散し始めている、ということを知っていた、皆んなに注意したのでしよう、との答え。とはいえ、出演している私達は、マスクをするわけにはいかなないので、その変わってしまった人たちに囲まれながら撮影を終えた。「コロナ」という言葉は一度も出てこなかった。

作品が出来上がり、何週間目に、記者会見と試写会が行われることになっていったのだが、その時、「コロナ」のため中止と申し渡された。あの時から三年も経ち、今でも目に見えないウイルスが飛びまわり、感染者の数が毎日テレビで報道されている。

コロナの話が出はじめた頃、百年前の「スペイン風邪」の例がよく出てきた。スペイン風邪は母の定番だった。昔の話をほとんどしない母なのだが、スペイン風邪の話は繰り返し聞かされていた。姉二人がスペイン風邪に罹り、見舞

吉行和子（よしゆき・かずこ）



東京生まれ。1954年「劇団民藝」に入団。57年、舞台「アンネの日記」でデビュー。『愛の亡霊』（78）『東京家族』（2013）で

日本アカデミー賞優秀主演女優賞を受賞。02年『折り梅』で毎日映画コンクール田中絹代賞を受賞。主な出演作に映画『佐賀のがばいばあちゃん』『おくりびと』『人生、いろどり』『燦燦』『家族はつらいよ』『雪子さんの足音』など。エッセイ集『どこまで演れば気がすむの』（1983）で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

いに行った父親にもうつり、三人とも死んでしまった。家は人に騙され没落し、十五歳のあぐりは、学校を続けさせてあげるという条件で、近所の吉行家に貰われていった。

「それでね」と母は言う。お姉さんが死ぬ時、残りの命はあぐりに上げる、と言ったのよ、だから私はこうして、いつまでも、いつまでも、生きているのよ、元気なうちは有難いことだと感謝もしたけれど、ここまで来ると、いいかげん嫌になっちゃって、一体、いつまで生きていればいいのでしょうか、と百七歳の母は嘆く。

仕事が好きで、九十七歳まで続けていた。パーマネットが未だ日本に入って来ていない時から、美容の仕事をして、後年は、小さな美容室で、長いこといらしてくださいっているお客様何人かを相手に、一人で働いていた。それが三回続けて骨折して、とうとう歩けなくなってしまう。百歳からの七年間は、自宅で寝たきりになった。何でも自分でやりたかったのに、全てを人の手を借りなくては駄目になったのは、見ているこちらが辛かった。

しかし、見事に文句も言わず、「ありがとう

「ごぞいます」とヘルパーさん達に礼を言いつつ静かに寝ていた。それでも時々私の顔を見ると、「何で私はこうまでして生きてなきやならないの、スペイン風邪のせいね、お姉さん達はどれだけ命が残っていたというのかしら」とボヤいていた。このコロナウイルスの話が出まわった時、母が知ったら、むしろ懐かしく昔を思い出したかも知れない、と私は思った。

しかしここまで長引くとは、誰が想像しただろう。私が生きている間には、コロナが消えるとは思えなくなつた。

私の楽しみは海外旅行をすることだった。仕事以外、これという趣味の無い私は、知らない国を見てみたい、というのが楽しみだった。その為に一生懸命仕事もした。コロナ騒動の前に十年間有効のパスポートを更新した。ちよつと無駄よね、と思いつながら、そんな弱気でどうする、と自分を励ました。ところがどこにも行けないではないか、どうするこのパスポート！

先日思いついてプラネタリウムに行った。十代の頃、胸ときめかせて入ったあの空間、人生二度目。ビルに囲まれている私の家からは、

空を見上げるのも難しい。今さらとも思ったが、これが思いのほか楽しかった。星が見えるのは当たり前だが、見たことのない景色が現れ、木々が茂り、花が咲きみだれ、うつとりしていたら、突然水の音、もうすっかり忘れていた川の流れる音だった。何て気持ちのいい音だろうと驚いた。まだもう少し自分を楽しませて生きていなくては。自分を楽しませるのは、自分しかない。また何か考えよう。

につくきコロナに教えられ

山川 静夫

(芸能評論家・元NHKアナウンサー)

大阪放送局に勤務していた頃の昭和四十二年の春、「橘ノ円都」という落語家と対談し、『七草正月』という噺を聴いた。

その上方落語の枕によると、上方では正月七日の「七草」の行事として、七草粥をつくることに唱える呪文のようなものがあることを知った。今でも続けている家庭があるかもしれない。「七草なずな、唐土の鳥が、日本の土地へ渡らぬうちに、トントンパタリ、トンパタリ、ストトンパタリ、トンパタリ……」と、七草を菜切り包丁で切るときに、主人が調子よく唱えると、うしろに並んでいる家族一同が声を揃えて、

「オテテテテ」

これで儀式がすむという。

つまり、日本では昔から「唐土」の鳥が、よくないものを運んできて、それを日本の上空でまき散らすので疫病が流行すると思われていたから、その厄払いを「七草の行事」として続けていたのだ。

唐土、つまり中国との関係が難しくなっている昨今は、こんな古風のおまじないのような慣習でも、日中外交に努力している人たちから、「けしからん」と叱られそうだ。たしかに、古くは遣唐使や遣隋使が日本から派遣され、文化面では、いろいろと良い刺激を中国からいたゞ

いたことは十分承知している。これからも仲良く付き合いたいものだ。

それはさておき、コロナは世界中に厄介な問題をまきちらし、これまでの生活習慣を変化させるほどの影響をうけたが、わが家もコロナによって気付かされたことがある。

山川 静夫（やまかわ・しずお）



1933年静岡市出身。国学院大学卒業後、56年NHK入局。アナウンサーとして『ひるのプレゼント』『ウルトラアイ』『邦楽番組』

担当。74年から『紅白歌合戦』白組司会を9年連続つとめる。著書は『歌右衛門の疎開』『勘三郎の天気』『人の情けの盃を』『胸の振子』など多数。近著は『歌舞伎思い出ばなし』『文楽思い出ばなし』。90年『名手名言』で日本エッセイスト・クラブ賞。

三回目の予防ワクチンを、私と共に打った女房が、半月ほど経過してから、全身に湿疹が現れた。私の体は何事もない。すぐ、かかりつけの医院で診てもらった。原因はわからないし、帯状疱疹ではないという。症状はひどくなる一方で、皮膚科の医院をたらい廻させられたあと、薬の関係にくわしいとされる大病院を紹介された。

診察した医師は、

「原因はわかりませんが、症状がひどいので、すぐ入院していたら、いって、じっくり治療しましょう」

と、即断され、そのまま下準備もなしに女房は入院した。

コロナが蔓延まんえんしている時期だったから、家族さえも入院患者とは面会禁止だ。結局は、四十日間も女房とは顔を合わすことなく、電話で連絡するだけで、九十歳近い男が、初めて、長期の独身生活をせねばならないハメにおち入った。

これまで、三食の食事はすべて女房にまかせきりだったから、料理は不得手だ。仕方なく電

子レンジの「チン」を活用して、コンビニの冷凍食品を主力とし、時々外食をはさんだ。しかし、親しい友人との楽しい会食はうれしいが、夕方出掛けて寂しくひとり食べるのは少しもおいしくない。

そればかりではない。毎日の洗濯、掃除、買物、風呂、ゴミ捨てもあれば、電話の応対もある。少し休んでいると宅配便のチャイムが鳴る。もうヘトヘトだ。これも今まですべて女房がひとりで処理していたことに気づき、恐れ入った。

この女房の四十日間入院は、老化した私の身体に大きなダメージを与えた。神経も疲れた。今までは、六歳下の家内に介護されることばかり考えていたが、それをくつがえしたのは皮肉にもコロナだった。老人がひとりで暮らすむずかしさを教えてくれたのである。

一番こたえたのは、夫婦の語り合いが断絶してしまうことだ。普段はたいした会話もしていないのに、いざ一人だけになると、話し相手を失ない、新聞を読んでもテレビを見ても、まったく反応のない毎日は、想像以上につらく寂し

いのだという思いを身にしみて感じたのである。

日頃、仲良くしていた友人が、悲しいかな一人ぼっちになってしまつて、それをなぐさめるときに「淋しいだろうが、頑張つてネ!」と軽く伝えていたのを思い出し、反省させられたし、老々介護の生活をしていても、二人で協力できるという、「それだけで幸せ」と感謝すべきなのである。

女房は四十日間の入院を終えて帰ってきたが、原因は「ワクチンの後遺症ではないか?」との説明ばかりで、今だにはつきりしない。全快はまだ先になりそうだが、日常の話し相手が存在することは、かけがえのない幸せである。

コロナはいつ果てるのだろうか。予防は難しく、ワクチンの効果も人それぞれだろうが、数々の苦い体験に出会つて気付いたことも一杯ある。人生は山あり川ありで、禍福はあざなえる縄の如く、交互にやつてくる。暗い面ばかり考えていても仕方ない。につくきコロナにも教えられることもある、と自らをなぐさめて、いやなマスクも我慢している昨今だ。

今の私にとって、 仕方がない？ これって差別？

樋口 恵子

(評論家・東京家政大学名誉教授)

年末が近づくと、ここ数年来複雑な気持ちで郵便物を点検するようになった。八十年代半ば以降のことだ。それは私が大学を卒業して新人として就職した会社、マスメディアの一角を占めるJ通信社からの新年宴会の招待状である。いわゆる「マスコミ界」の有名人をはじめ多くの関係者が集い合う。この種の新年会があまりないせいもあって、場所はだれでも知っている有名ホテルだし、バイキングの美味もままず。楽しみに待っている人も多く、私もその一人だった。そこへ行けばリベラルから保守派ま

で、まんべんなく出会うことができ、楽しいひとときを過ごすことができた。

ところが八十歳半ばごろから、その招待状がこなくなった。もちろん私はどんな基準でも選ばれるようなエリートではない。「元社員」のおかげさまで呼んでもらえただけの身分である。でも、機会があったので、現役の社員に聞いてみた。これは、当の通信社の「基準」であつたらしい。

「一律に決めていることなので、樋口さんだけ例外にするのはなかなかむずかしいと思いま

す」

今まで考えたこともなかったが、「パーティ定年」、「パーティ適齢期」というものがあることを初めて知った。率直に言って最初は「年齢差別だわ」と腹が立った。元氣だったマスコミ有名人も、年経れば時代の風と共に影響力が

樋口 恵子（ひぐち・けいこ）



1932年東京生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。時事通信社、学研、キャンオンを経て評論活動を行う。現在、東京家政

大学名誉教授、同女性未来研究所名誉所長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長。著書に『老くい、どん！あなたにも「ヨタヘ口期」がやってくる』（婦人之友社）、『老いの福袋』（中央公論新社）、『90歳になっても、楽しく生きる』（大和書房）ほか多数。

衰え、新人が台頭してくるのは当然の話。生き馬の目を抜く敏感さがなかったら、マスメディア自体生き残れないだろう。半ば納得しつつ、旧知の人と出会う機会が減った私は「仕方がないけれどつまらないの。やっぱり高齢者排除だわ」と老いをかこっていた。

そんなとき、私が考えを変えざるを得ない場面に会った。高齢者医療にかかわる欧米の大先生が数日来日されて、主催者の企業が総勢三〇四十人の内外の専門家を招き、ミニ講演会とお食事を企画し、私も招かれた。

出席者は企業人にせよ学術関係者にせよ一定の業績をあげた人ばかりだから平均年齢六十代だったと思う。私のお隣は、日本の高名な現役の医学関係の大先生。実年齢は私より二、三歳年長。このグループの中で最年長だったかもしれない。もちろん現在も大活躍、私はお顔を存じ上げている程度だったが、丁寧に一礼して指定された隣席に座した。

——そのうちに、隣席の大先生が何か食物にむせたらしく、咳込まれた。だれでもよくあるこ

とだから最初はだれも気にしなかったが、なかなか治まらない。私は大先生の隣席で十人弱のそのテーブル唯一の女性。こういうときホテル側の従業員が別室にご案内するかと思つたが、ホテル職員は何ごともなかったように食事のサービスを続けている。情けないことに私は海外留学の経験もない国際オンチ。こんなときすぐ隣席の客としてどうするべきか全くお手上げである。大先生の意に反して私が人呼んだりしたら、それこそ越権行為というものである。

長い長い時間が過ぎて、その間、大先生の咳込む声以外は食器の音さえ控え目であった。ようやく大先生の咳は静まった。あのととき、隣席の客として私はどうするのが正解だったのか、まだ学ぶ機会がない。今度外国のマナーに詳しい先生に出会ったら教えを乞うことにしよう。

高齢者の病気のひとつとして誤嚥性肺炎がよく話題になる。食事を嚥下する時、食道でなく气管のほうに「誤嚥」してしまい、咳込んだり、

ときには誤嚥性肺炎で死亡に至ることもある。年をとつたら、ゆつくりと、一口の飲み込みを自覚して丁寧に行うことが必要である。

ここで私は、古巣のJ通信社の新年宴会定年を肯定する気になった。高齢者は誤嚥を起しやすいのである。きっとその通信社の総務担当者が「招待者八十五歳定年」を決める前に何件か、高齢者の小さな事故が積み重なっていたのではないか。

「ま、いいか。仕方がないわねえ。老化の必然だけど」

今年も早師走。喪中につき年賀欠礼の知らせが続々と届き始めた。この二、三年は訃報を知りながら、こちら健康万全とは言えずお別れ会にも参列できなかつた例が増えている。

J通信社からの新年会パーティーの招待状はことしもやつぱり来ない。もはや納得である。

バトンのゾーン

「きょう子さん、今までみんなのご飯を作ってきたけど、もう私はここまで。今日からは、きょうさんが作って」

と、義母に言われたのは、結婚数年後に同居してから、13年目のことだった。

義母は、料理上手で、私たちの共働き子育てを、長年支えてくれていた。

編集記者として、毎晩のように遅く帰る私に代わり、孫を見て、食事も作ってくれていた。フリーライターになってからも、同じように。その子供たちも、中学生と小学校高学年になっていた頃のことだった。

並木 きょう子
(フリーライター)

義母の言葉を聞いた私は頭がガンとして、「あの、リレーには、バトンタッチするゾーンってあると思うのだけど、お母さん、今回、それって、ありますか？」

と、質問した。陸上のリレー選手が、バトンを受け継ぐとき、お互いに全力で走りながらバトンタッチをする姿を思い浮かべながら。

13年間も続けてきてくれた、義母からの家族全員のご飯作りというバトンは重く、一緒に走るゾーンがほしいと。義母は、すぐに私の心を察してくれて、笑いながら、

「きょうさんに、たくさんは期待していな

いから、そんなに意気込まなくて大丈夫よ。簡単でいいから、自分でできる料理から始めれば…」

と、もう作らない覚悟を決めた話し方。

明日から、義父母と私たち夫婦と子ども二人

並木 きょう子（なみき・きょうこ）



1948年、東京生まれ。1971年、国学院大学文学部卒業。同4月主婦の友社入社。主婦の友編集部記者11

年を経て、フリーライターに。主に女性と仕事をテーマに、人の生き方を描く人物ルポ、エッセイを執筆。著書にエッセイ『ごちゃまぜ同居進行曲』（主婦の友社刊・TBS系テレビでドラマ化）、人物ルポ『喝采―いま輝く明治・大正の女たち』、『人生き・ら・ら』（以上、主婦の友社発売）、エッセイ『300字の小さな幸せレシピ』（アップオン刊）。

の6人分を、朝昼夕、作る。仕事は、しばらく、スローダウンしよう。

メニューを作り、買い物に行き、冷蔵庫に入れて、買い忘れないか、指差し確認。今ままで、義母が揚げている天ぷらの揚げたてを、横に行つては、つまんで食べていたのに。

ああ、ついに親に甘えていた生活から、義母のように「立っているだけで立派な主婦！」になる日が来てしまった。どうしよう。

でも、私にも意地がある。それで、「おいしい！」と家族をうならせる料理を作ろうと、レシピを見ながら、大作に挑んだ結果、家族は夜の8時になつても出来上がらない夕食を待つことになり、義母が、

「お父さんと私は、いただいた佃煮とお茶漬だけでいいから」

などという事態に。

義父は、夕食準備の時間になると、台所に来てウロウロ。お父さんに手伝えることはないかと、そつと聞いてくれた。

「きょうは、料亭のおだしの取り方を真似して、本格的にやってみますから」

などと私が大まじめにいうのを聞いて、二人は、ため息をついていたに違いない。

しかし、人間は、やればできるし、進歩もする。おいしいものが大好きで、それが自分でできるという料理作りは私の性分に合っていて、できる料理が増えていった。義母の味も覚え、義母がある日「きょう子さん、もう私の味は、免許皆伝よ」と喜んでくれた。

義父母は、自分たちの部屋で（それをうちでは、松の間と呼んでいたが）テレビの大相撲など見ながら、夕食を待っている。

「松の間の皆様、夕食ができました」と、私が声をかけに行くと、二人は、

「やっぱりカレーのにおい！」とか、「五目寿司、大好物だよ」と、うれしそうな顔で食卓に並び、おいしそうに食事した。

振り返ると、食卓はいつもドタバタしていたが、家族の誰かの笑い声が聞こえていた。

そして今、私は息子と息子の妻と二人の孫のために、仕事の時も、自分が何かやりたいことがある時も、共働きの若い一家を支えられたらと、義母と同じように料理を作っている。コロ

ナで、おうちご飯が多くなって、この二年間は特にがんばっている。

息子一家は徒歩500歩のところに住んでいるが、駅に近い我が家は通り道で、ご飯ができている限り、みんな寄って食べて帰る。

先日、息子一家が来るとわかっていたのに、私が出先から、遅くなって帰ることがあった。出来合いのものを買って帰ると、息子の妻が嬉しそうに、

「あつ、お母さん、お帰りなさい。今、ウーバーイーツで何か取ろうと、携帯見ていたところだったんです」と言う。

「間に合ってよかった、ギリギリセーフ」

と私。何十という店から選べる料理の宅配なんて、私の時代にはなかったなあ：多少やれやれと思いつながら。

時代は違っても、きっと義父母に、私も同じようなことを言い、たくさん、やれやれと思わせたのだろう。義父母は、一度も怒ることも、いやな顔をすることもなく、30年余り、面白がつて、私に付き合ってくれた。

さて、息子の妻に、私のご飯作りのバトンを、
渡す番である。義母が、バトンを渡したその歳
を、私も過ぎた。

が、人生は百年時代に入ったから、もう少し
がんばれるかもしれない。

それと、この頃気づいたことがある。ご飯の
バトンは、姑から嫁へだけでなく、家族の「世
代から世代へ」と引き継いでいくものになって
きたのではないかと。

義母から受け継いだ後、時代は動いた。

これからは、息子の妻だけでなく、息子にも、
走者になってもらいたい。幸い料理好きだ。義
母と違って、バトンを渡すほうの私が、いまい
ちどっしりしていないが、息子の妻、息子にも、
しっかりと渡そう。

その時は、バトンのゾーンを長めにとろうと
思っている。

天災は忘れなくてもやっつけてくる

鵜飼 哲夫

(読売新聞編集委員)

スペイン風邪といえば、今では、あのパンデミックを頭に思い浮かべる人が多いだろう。

第一次世界大戦さなかの1918年から20年にかけて起きた感染症の世界的な大流行で、世界の人口の4分の1に当たる5億人が感染し、死者が4000万〜5000万、流行性感冒と呼ばれた日本では、内地で45万人、外地では28万人が死亡したと推定されている。

新型コロナウイルスの流行でスペイン風邪が注目される以前に、どれだけの人がこの事実を知っていたのだろうか。私はといえば、スペイン風邪という言葉の本などで側聞していたが、正直これほどの災厄であったとは知らなかつ

た。

そこで、まずは歴史に学び直そうと、「世界史」「日本史」の教科書で、スペイン風邪がどう教えられてきたのかを調べてみた。確認した限り、ペスト（黒死病）についての記述はあっても、この災厄に触れた教科書はなかった。つまりは、スペイン風邪は、一般には「忘れられたパンデミック」だったのだ。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という言葉があるが、教科書にもない歴史から私たちは何を学べというのだろうか。

そんな思いを胸に、パンデミックの起きた2020年の夏、東京大学の歴史学者、加藤陽子

教授を訪ね、インタビューした。加藤さんは率直だった。スペイン風邪とその社会的影響について教科書には記載がないという指摘を、歴史家として率直に受けとめつつ、1923年に起きた関東大震災（死者・行方不明者は推定10万5000人）では、社会の風景が激変した結果、人々の記憶が強く残ったのに対して、そ

鵜飼 哲夫（うかい・てつお）



名古屋生まれ。

1983年に中央大学法学部卒、読売新聞入社。文化部で文芸、書評面などを担当。2013年から編集委員。

著書に『芥川賞の謎を解く』（文春新書）、『三つの空白 太宰治の誕生』（白水社）。編著に『芥川賞候補傑作選』（春陽堂）。インタビューをまとめた本に畠山重篤『牡蠣の森と生きる「森は海の恋人」の30年』（中央公論新社）、中西進『卒寿の自画像 わが人生の賛歌』（東京書籍）。

の数年前のスペイン風邪では世の中の風景が変わらなかったことが忘れられた大きな原因とした。

戦後、国内では大戦景気にわき、世界でも国際連盟が設立されるなど、歴史上、効率化、合理化を進める画期的出来事がパンデミックの惨事の後に相次いだことで、「記憶は上書きされ、疫病は忘れられていきました」（2020年7月28日、読売新聞夕刊「編集委員 鵜飼哲夫の『ああ言えばこう聞く』より）とも語っていた。

さて、私たちは、今回のコロナをどう歴史に残し、後世に伝えていくのだろう。もちろん、それは専門家などが様々な声に耳を傾けながら、事実を検証しつつ考えていくべきことであり、一記者の任ではない。というか、手に余る。

ただ、言えることはありそうだ。この新型コロナウイルスでも、戦災や震災のように都市などが崩壊するなど街の風景が変わることはなかった。とはいえ、スペイン風邪の時代とは違い、国内では緊急事態宣言で外出自粛、欧米などでは法律でロックダウンが実施され、繁華街から人の姿が消えるさまを人々はテレビでみ

た。目に見えないものに恐怖を覚え、街から活気が失われる。それは2011年の福島第一原発事故後、被災地となった自治体の姿とも重なる、きわめて現代的災厄の風景だ。

同時に、テレワークが広がり、自宅で過ごす時間が増え、運動不足を解消しようと、近所を散歩する人が増えたことも特色だろう。かくいう私もその一人。それまでの自宅、会社、酒場の三角コースだった生活が一変し、ほとんど歩いたことなかった、自宅近くの利根川べりの自然と日々接するようになった。そして、天気の良い日には、富士山が見える土手道を散策しながら、折りに触れて解剖学者、養老孟司さんの言葉を思い出す。

養老さんは、目の前の効率ばかりを重視し、「ああすれば、こうなる」という予測と統御でつくる「脳化」社会の行き過ぎを見直すよう、取材のたびにおっしゃり、そうした自然を疎外する意識中心のありようをどう変化させたらよいのか、と聞くと、いつも、「虫でも植物でも、人間がつくったもの以外の自然を1日10分だけでも見るといい」と語っていた。

「それで何が変わるんですか？」と聞くと、それこそ、「ああすれば、こうなる」という思考そのものじゃないか、という感じで、あきれた顔で答える。

「そんなもん、やってみなきゃわからない」さて、私は、この2年ほど、1日10分以上、近所の自然をボーツと見つめている。つまりは、「やってみた」。何が変わったのか。よくわからない。きょうもこの原稿を書くために、コロナをどう後世に伝えるのかを自然の中で考えた。もちろん、妙案はない。当たり前だが、人間が作った都市のビルなどと違い、動植物や虫が四季折々、姿形を変えていくさまに新鮮さを覚え、彼らとともにあるウイルスや細菌の、人類よりもはるかに長い歴史を感じるのみである。

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われるが、震災もパンデミックも、歴史の教科書に書かれるようになっても必ずやってくるはずである。忘れないことはもちろん大切だが、悠久の自然の営みは人知を超える。

天災は忘れなくてもやってくる。